
トールの直行

タケノコ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

トールの直行

【Nコード】

N9467Y

【作者名】

タケノコ

【あらすじ】

トールとカルト、二人の主人公が織り成す異世界ものファンタジー。毎日更新予定。

1話

神人、それはこの世界アムステルスで最も強大な力を持つ二つの種族を指す。一つは人型の赤い毛の虎「赤虎」。もう一つは人型の黄色い鱗を持つ龍「黄龍」。

この二つの種族は常にお互いを敵視し闘争を繰り返してきた。それは永年変わらないだろう。この争いに終止符をうつのは全身黄金色の毛を持つ赤虎である。

十

城内の広々としたホールは騒然となった。至る所から喧騒が聞こえる。人々が恐れ慌て逃げ惑っているのだ。

豪華なテーブルや椅子、調度品や豪華な食べ物がひっくり返ったり散乱しドレスアップした男女は遁走する。豪華な金色の絨毯は食材の汁で偏食している所までである。希代の怪物アグマは鉄製のハンマーでしばいても平然としてそんな分厚い窓を突き破り城に侵入してきた。彼は人型で全身緑色の肌をしていて額からは白い一本の角が生えている。服は着ていないし体格も大きい。

アグマの視線は真つすぐに中肉中背でとげとげの赤い髪をし赤い瞳のトールを睨み据えている。激しい殺気を全身からほとばしなから。ずんずん早足で進むアグマ。険のある表情をしている。トールは城に招かれたクラトに連れられてこのパーティー会場に来ていたのだ。モンスターの総称はノルテ。ノルテの中でも強大な力を持つのが人型だ。その中でも危険度が非常に高い一人がアグマだった。

2話

アグマは慌てる賓客達を無視しながら憤怒な表情で述べた。

「邪魔さえしなければお前達にはなにもせん」

アグマは遮蔽物となった立派な椅子を蹴り飛ばしテーブルは腕で投げ飛ばしながら歩度を上げ歩く。突出したノルテである彼は立ち向かってくる槍を持った兵士達を手刀で切り殺していく。

ある者は首を切断され、またある者は胸を貫かれ黄泉の客へと変貌を遂げていく。兵士達の身につけている鎧等は布切れの如く裂け、破壊されていた。恐怖で足が竦み上がり動けなくなったトールは尻餅ついている。

彼は恐怖から声すら出ない。アグマは乱入してくる兵士達をあしらいつつながら着実にトールに接近してきていた。トールの傍らにはスミレとカルトが居る。スミレは肩までの黒髪、陶器のような白い肌に大きな瞳を持った美少女だ。そんな彼女と並んで立つのがカルトである。彼は整った容顔で銀髪を背中辺りまで伸ばしゴムで結っている美少年である。

カルトとスミレが一緒にいるとまるで絵画を見ているようだ。二人共トールを引っ張ったり抱き起こそうとしている。しかし余り猶予は無い。子供三人にとっては凄まじい脅威となる怪物が近づきつつあるのだ。

彼等を庇うように前に立つボサボサの金髪に青い瞳、少し小しわのある顔のクラト・ローバイスは腰にはいた剣を抜いた。

3話

悲鳴や叫び声がこだまする大型のホール。そこではなだれ込んで来た兵士達と逃走する賓客や王族、貴族達で溢れていた。アグマは緑色の肌の顔に憎しみを表しながら

「邪魔だ！」

アグマは鎧を着込んだ歩兵三人を一瞬で血祭りにあげた。一人の陸兵の槍がアグマの肩に刺さる。

しかしアグマは平然とその槍を引き抜き二つにへし折った。それからも一人、二人、十人、三十人と精兵を殺戮した。もう戦おうとする衛兵は居ない。

圧倒的な強さを目の当たりにして敗走してしまったのだ。

「お前も邪魔だてするのか？ その赤虎の臭いがする小僧を差し出せ。それなら命は助けてやるう」

アグマは緑色の口角を上げシニカルに微かに笑いながら喋った。それに両手で剣を構えるクラトは答える。

「教え子を守るのは先生である僕の責務だ。その要求は飲めない」

クラトの後方でトールは赤髪を小刻みに揺らし震えている。アグマの目はトールを見据えている。トールはまるで蛇に睨まれ蛙のように身動きがとれない。

彼は十何年という短い人生の中でこの瞬間、瞬間に最も恐怖を感じ取っていた。生きた心地がしない。頼りになるのは孤児院から引き取ってくれた恩師のクラトだけだ。

4話

アグマはゾツとするような笑みを零し

「そんなに死にたいなら……屠つてやろう！」

重心をやや前にし疾駆するアグマ。彼からはまがましい気配が発散されていた。それに対抗する為にクラトはあれ放題の金髪を靡かせ剣を下段に構えながら駆け出した。そして魔腕を発動させる。

魔腕とは筋肉を増強し力を上げる技だ。彼の腕が膨らむ。クラトは縦切りを繰り返すがアグマはそれを右手で握った。クラトの剣を赤い血が伝う。アグマは己の優位を確信しツールを人差し指で指差しながら言葉を紡いだ。

「お前の力量は理解した。まだ伸びしろもある。その赤髪のカギを差し出せ。これは要求では無い、命令だ」

クラトは歴戦の猛者だ。相手の力量を理解できないほど愚かではない。しかし逃げるわけにもいかなかった。

自分にとって最も大切なものをみすみす失うのは耐えられない。彼は教え子のためなら命を捨てる覚悟があった。死んでも守りきるとクラトは心の中で呟いた。彼にアグマの強力な圧力が加わり顔中から汗を流す。アグマはノルテの中で自分が最強だと自負していた。多岐に渡る理由から同族と死闘を展開したこともあった。しかし一度も敗北をきつすることは無かった。全て圧勝で面白みに欠けるとアグマは内心つまらなく思っている。

5話

クラトとアグマはひとしきり睥睨しあった。お互いひくつもりない。激突は避けられないようだ。これから命を賭けた死闘が繰り広げられる。敗北はすなわち死だ。そのうえクラトが負けるとトールの命の灯もあえなく消えてしまう。

教え子のため敗戦が色濃い勝負に打って出る。少なくともこの強靱なノルテを逃走かあるいは深手を負けさせなければならぬと頭で考えるクラト。クラトは剣に力を込め述べた。

「魔腕十割！」

そう発した者の腕が元のサイズの二倍ぐらいに膨れ上がる。彼の腕の部分の服が引きちぎれた。クラトは全力を挙げアグマに仕掛けた。

クラトの剣がアグマの緑色の指を切断し自由になる。アグマは顔をしかめた。ノルテにも痛みはあるようだ。美少年のカルトはそれを見て安心した表情をした。

勝てると思つたのだろう。クラトは剣を縦に振るう。アグマはそれを再生させた右手で防ぐ。重い一撃のためアグマの足が石の床に食い込む程だ。彼は楽しそうに笑っていた。バトルに喜びを感じているのかもしれない。

幾度もの戦いで洗練されたアグマは実力でクラトを上回っていた。そのため余裕のある尊大な態度を崩さない。クラトは現状を打破出来る手段を思案する。

6話

しかしアグマは冷静だった。次々にクラトが繰り出す攻撃を防ぎかわす。アグマは人を凍りつかすような恐ろしい形相をしている。今までも何十、何百という強敵を鬼籍に入らしてきたことだろう。

彼の宿敵になりえる豪傑や剛の者は皆無だった。それほどまでにアグマは歴戦の勇士達より実力が軽く抜きん出ていた。

そんな強豪に狙われトールは不運だ。彼は動揺を取り繕おうと躍りになっていた。トールは自分がこの場に居てはクラト先生の足手まといになってしまふのではないかと危惧していたのだ。

しかし彼の足は石のように重く、しかも痙攣し動けない。スミレとカルトはトールを地面に引きずりながらクラトとアグマから距離をとった。激戦に巻き込まれたら一たまりもないだろう。

「なぜトールを狙う。目的はなんだ？」

クラトの詰問にアグマは憤怒の表情を顔に浮かべると

「ルナス姫の敵討ちだ。俺の最愛の人だった……。全て赤虎が悪い！」

アグマは憤慨しキツとトールを睨みつける。そのトールを正視する目には怒りと悔しみが含まれていた。アグマとトールの視線が交わる。

トールは慌てて目を逸らした。彼の背筋を悪寒が走った。アグマは上段蹴りを相対する者にしかけた。それをクラトはしゃがんでかわす。二人は激闘を繰り広げる。

7話

十二歳のトールは背筋が寒くなった。こんな化け物級のノルテに狙われるなんて。生きた心地がしなかった。先生は勝てるだろうかとトールは不安になった。アグマの発言やそぶりから僕を殺すつもりだろうとトールは察していた。

彼はクラトに色々教わりながら冒険をしてきたが今まで出会ったノルテの中では最強に位置づけられる力をアグマは持っているとは断定出来た。なにをしたらそこまで強大な力を得られるのだろう。尋常じゃない努力か、あるいは天賦の才か。

クラトとアグマの対決は十二歳の子供三人（トール、スミレ、カルト）にとって神々の死闘のように思えた。両者共卓越した実力を備えている。力の差は開きがあるが。

クラトとアグマは城にある広いホールでしのぎをけずっている。もうこの場所にはトール達三人とクラトとアグマしか居ない。

皆退散してしまったのだ。クラトとアグマは攻防を展開させていた。押されているのはクラト。彼の強力な一撃をすんでのところで避けるアグマ。強靱な肉体を持つアグマはクラトの攻めを子犬とじやれているかのように対応する。アグマが反撃に転ずる。

「グワ！」

クラトの脇腹をアグマの手刀が切った。唸るクラト。彼の茶色の服に血液が染み込む。

8話

「お前の攻防のパターンはおおむね理解した。最後の忠告だ……その赤い髪の子供を渡せ！」

クラトは右手に剣を持ち左手で脇腹を押さえながら苦しそうに笑い

「それは出来ない……」

「なぜだ？」

アグマの質問にクラトは

「彼等は僕にとって最愛の存在だ……ク！ ……彼等より先に死ぬ気は無い！」

アグマは僅かに俯き苦笑を漏らした。クラトに対峙する者は尋ねる。

「お前の名は？」

「僕はクラトだ……グッ！ ……」

クラトは両手で剣を持ちアグマに迫る。血がクラトの脇腹から垂れ重傷であることは一目瞭然なのにクラトは諦めずアグマに立ち向かう。

「先生！ 僕は死んでもいい！ だから無理しないでください！」

トールの涙声に顔中に汗をかいたクラトはトール、スマレ、カルトの順に一瞥すると

「トール、君は優しい子だ。スマレ、君は太陽のように明るい子だ。カルト、君は人の気持ちが分かる子だ……グクツ！ ……僕達は血は繋がっていないが孤児院から君達を引き取って以来自分の子供のように思っているよ……それじゃあ、さよならだ……」

アグマは右腕を一閃させた。クラトはそれをかわしきれずに頬を切られた。頬から血が滴る。クラトは剣を振り上げ

「ヒートブレイク！」

9話

クラトの放った技ヒートブレイクは自らの命を捨て何倍にも威力を上げる必殺技だ。その斬撃は一直線にアグマに襲い掛かる。

アグマに相対する者は自分が最も大切にしている教え子達のために命を放り捨てた。僅かだがアグマに対し勝算はある。例えば自分が死んでしまっても最愛の者達を守れば本望だとクラトは心底思った。

彼の繰り出した強力なその一撃は触れたもの全てを滅ぼす程だ。

クラトの剣から白いまばゆい光が壁のタペストリーや天井のシャンデリア、調度品やトール達全部を包みこむ。全てに光の帳がおりた。トール達はクラトからヒートブレイクの説明を受けていた。この技を使う時は君達と別離の時だと。君達三人を心の底から愛している……そうクラトは呟いた。トール達は先生が死んでしまうと悟り涙を流しながら異口同音に

「先生!!」「」

一際白くまばゆい光が辺りを埋めた。その後待っていたのは森閑だった。トール達三人は涙を目元に溜めながら意識を失う。それから数時間後気絶していたトール達は兵士達に発見され救助されることになる。幸い彼らはどこも負傷していなかった。

しかしクラトとアグマの姿はどこにも無い。そのため生死は定かではなかった。クラトとアグマの最後に激闘した場所には巨大なクレーターが出来ている。

10話

クラトとアグマの戦いがあって以来五年の年月が流れた。中肉中背でとげとげ髪の赤髪に赤い瞳のトールはキノコ兵士の槍による一撃をかわした。

ここは草木が生い茂った森の中。危なかった。すんでのところだった。トールの小便が一瞬途切れ、また放尿が始まる。

「うわっ！ ちょっと止めて！ 今は戦えないから！」

トールはちょうど木陰で小便をしている最中にキノコ兵士に襲われたのだ。そのモンスター、キノコ兵士は赤い肌をしていてキノコを巨大化させ手足を生やしたようなモンスターだ。先の尖った槍を振り回すので油断できない。

まあ動きが鈍速に近いので普通に戦っていたら並の冒険者なら楽勝で倒せる相手だ。しかしトールは排尿で両手が塞がっていて反撃どころかかわすのすら苦心する様相を呈していた。

早く小便終われとトールは念じた。しかし勢いのある小水は止まることが知らない滝のように溢れ出る。相手は弱小モンスターだがなすすべがない。トールは切れ切れになる小便を森の中に撒き散らしながら必死に逃げる。前にジャンプしたりかに歩きで。

「あっ、やっと終わった」

「っー」

喋ったのはトールにカルトの順だ。

11話

ズボンのチャックを上げ下げし戸惑うトール。その傍らに彼の悲鳴にかけつけて来た銀髪を背中辺りでゴムを使って結った美男子カルトが居た。

彼が右手に黒いもやを宿し、その手でキノコ兵に触れるとそのモニターは幻であったかのように消失した。その呪文は禁断の属性、闇に関わるものだ。呪文の名は「闇食い」。その闇を纏いし手に触れた者は跡形も無く消え失せる。

禁断とする理由はノルテが多用するためだ。まあ、そのほとんどは強大な力を有する人型のノルテだが。カルトは闇属性の呪文を好んで使う。属性が闇の呪文は強力だが使えば反動として心を病んだり身体に異常をきたす者も居る。

いふなればもろ刃の剣だった。カルトは強くなる必要性があった。その目的のためには突出した力が居る。今のままでは闇呪文の神童とまで持て囃された『あいつ』には敵わない。

カルトは日々の冒険のごとに力を増していた。彼はたゆまぬ努力家であったし、また優れた素養も持ち合わせていたのだ。カルトはニヒルに笑い右手を腰に当てながら

「トール……残念な奴だ。フッ」

「あつ、今僕のこと鼻で笑った!? 笑ったよね!？」

その後も自尊心を傷つけられたトールのカルトに対する追究は続いた。しかしカルトは笑ってごまかすばかり。

12話

赤、青、黄色、様々な色合いの鳥達が木の枝や樹冠に留まりさえずる森の中。草食動物が寄り添い仲睦まじくつがいで草をはんでいる。平穏を絵に書いたような場面だ。

トールとカルトの喧騒を聞きつけた肩までの黒髪に新雪のように白い肌、大きな瞳のスマレが早足でやって来て

「キヤツ！　こら馬鹿トール！　ズボンのチャックを上げなさいよ！　レデイの前で破廉恥よ！」

「え！？　あ！　ごめんスマレちゃん」

慌てたトールはチャックを上げる際に人の頭ぐらいの赤い石につまづき盛大に前のめりに倒れる。鳥達はその音を耳にして空高く舞い上がり飛び去っていった。

草食動物が達も顔を上げ耳をびくつかせ辺りを窺い歩度を上げて去って行く。トールは赤い髪に付いた葉っぱや土を掃いながら立ち上がった。

彼のズボンの社会の窓はしっかりと閉められている。トール達三人はアグマの一件以来修行を重ねいっぱしの冒険者となっていた。彼らは何度も冒険し危機を乗り越え成長している。

実力も以前と比べたら比較にならないほど高まっていた。三人共平凡なモンスターなら一蹴できる。

苦難、逆境は人を成長させる。今も三人でパーティーを組んでいた。攻撃的な呪文を得意とするトールとカルトに回復呪文も使いこなすスマレ。バランスも良い。

13話

トール達三人は仲が良いほうだろう。喧嘩もたまにするが。彼らの脇を藪から身を見せた人の赤ちゃんぐらいの体長の野性動物が走り去る。

その生物は口には上を向いた立派な牙が二本あり毛並みは美しい赤色をしていた。名はシノシシ。よく森や山に出没し、そこを生息地にしている。

別名『恋をみのらせる獣』。スミレは別名を知っていたようで

「シノシシだわ！ 私の恋も成就するのかしら？」

熱い眼差しをカルトにおくる彼女は頬を赤くする。しかしカルトはそんな気配を察知することなく銀の長髪をかきあげた。その髪は太陽光を反射し美しく光っている。

トール達は節くれだった木々の隙間を足早に縫うように進んでいく。大人が三人で手を繋いでも囲みきれない一本の樹木には青い二匹の虫が留まり角で相手を追い払おうと対決している。木の上側に居る方が優勢である。

今回の目的はキノコ兵士達の長、キノコ王の退治だった。そのノルテは討伐依頼が布告されて何年も経つのに達成されていなかった。これは意外なことだった。キノコ王は強力なノルテには分類されていないのだから誰かが倒していても不思議ではない。この案件にチャレンジした冒険者達もいるはずだ。しかし吉報はいつこうに聞こえてこないのだ。

14話

キノコ王はこの森の主でたくさんのキノコ兵士達に守られているらしい。キノコ王討伐には時間がかかるかもしれない。

守りが固いと思われる。いったい何体のキノコ兵士と勝負することになるのか定かではない。それに討伐依頼がずっと前から出ているのに解決していないという疑問もある。

何か特殊なスキルをキノコ王が持っているのか罨が仕掛けられているかもしれない。しかもキノコ王は財宝を持っているとのことだ。どれほどの宝か今から期待される。

しばらく木々の間を歩いた三人は大人が二十人で手を繋いでも囲めない大木に出くわした。とても雄々しく立派な木だ。トールは巨大な長寿の木を見上げながら

「僕がお菓子の城の方角を見てくるよ」

トールは木の節や出っ張りを頼りに大木を登っていく。しばらく登ると一番下の枝にたどり着いた。そこからは枝づたいに登って行き木の樹冠に到着した。

そこから方位磁針を片手に辺りを伺うと北の方向にビスケットの壁、莓ケーキの橋、チョコレート城が見えた。お菓子の城の内外には多数のキノコ兵士の姿があった。キノコ兵士は身長五十センチメートルくらいで全身赤色をしていて手には金属製の槍を持っている。

場所を視認したトールは木から落下しそうになりながら少しずつ降っていく。途中捕まっていた木の枝がポキリと折れ、あわや重篤な状態になりかけた。

冷や汗が彼の背中を伝った。木登りの反対をしている彼はやっとこさ地面に降り立ち方位磁針に従い北に向かった。目的地に向かう際に何体ものキノコ兵士や野性の動物ライズベルに遭遇した。

しかし一体一体確実に仕留め先へ進んでいく。ライズベルは身の丈二メートルはある肉食動物で青い体毛を全身に持ち鋭い爪が武器だ。

そいつは並のノルテよりも凶暴で厄介な相手であった。トールが尖った長い爪で切り裂かれそうになったがスマレとカルトのフォロ―で難を逃れた。

「嚴重な警備ね……橋は下りてるけど。カルト君どう思う？」

「スマレちゃん、僕にも聞いて……」

スマレはトールの発言を軽くスルーした。彼の反応を一言でいうならシヨックで口を大きく開け目を見開き『ガーン』といったところだ。かなり動揺しうなだれている。

容姿端麗なスマレは頬を赤くしながらカルトに尋ねた。言葉に緊張している様子が出ていた。なんかもじもじしているし。

トール達はお菓子の城が見える森の藪の間から城の様子を伺っていた。

16話

カルトは女殺しな微笑を称え「うん」とうなづくと続けた。

「俺達の実力なら正面突破も可能だと思う……相手は非力なキノコ兵士だけみたいだしな」

「正面から行くの？ 僕恐いんだけど……」

意見したトールだったがカルトの作戦が採用された。三人はおやつで出来た城に襲撃をしかけた。

トールは右手に魔力を集め風の魔力を集約した。すると右手の全ての指の先に五つの小さな渦が出来た。渦神という呪文だった。

城外でバトルが勃発した。トール達対キノコ兵士。その渦が赤いキノコ兵士に触れると風の刃によりキノコ兵士は切り刻まれ

「グエー！」

トールは次々と渦神でキノコ兵士を屠る。トールに向け彼の背後からキノコ兵士の一匹が槍を突いた。しかしその槍はトールには届かずスマレの手で押さえられる。

そしてスマレの強化魔法で威力を上げたパンチがトールを彼の背後から襲ったキノコ兵士を打ち吹っ飛んだ。トールがカルトを一瞥すると闇食いで一回り大きなキノコ兵士を倒すところだった。

大柄で体格の立派なキノコ兵士はカルトの右手の突きが触れると姿を消した。どうやらカルトが倒したキノコ兵士が指揮官だったよう。数十のキノコ兵士達は慌てて遁走した。

17話

トール達はイチゴケーキの橋を渡る時、ケーキの生クリームをすくって口に入れてみた。その感想はとても甘く奥深い味わいだった。トールは夢中になって食した。彼の口の周りにたくさんのクリームこびりついている。

「こら、トール行くわよ！」

口のふちに生クリームをいくつも付けたトールは口を服で拭い、慌ててスマレとカルトの後を追った。城内に繋がるビスケットの門をカルトは押し開いた。

鍵はかかっておらず無防備にもほどがあつた。城内の壁には鉄製の金具が付けられその金具の中でろうそくが燃えている。

また天窓から陽光が差し込み明るい。あの窓ガラスは何で出来ているのだろうか。水飴かな。トール達は一階を探索していると宝物庫を見つけた。その部屋には金銀財宝がうずたかく山のように積まれている。

「やったあ！ 僕達これで大金持ちだね。さあ、魔袋に入れて帰ろう」

「待て、トール！」

「へ？」

カルトの静止の声を聞かずトールは金びかの鎧に触れた。すると城中からけたたましいサイレンのような音が鳴り響く。警報だろう。トール達の前に突如人型で緑色の肌にコウモリのようなたくまし

い羽が背中に生えたノルテが現れた。

とても険しい顔でトール達を睥睨したそのノルテは

「私はルージン。人間か。よくここまで来れたな。だがここでおまえ達の生涯は終わりだ。用心棒としてお前達を排除する」

カルトは一瞬で自分達に相對するノルテの実力を理解した。厳しい戦いになると。ルージンは羽ばたき飛行し体の周りに赤々とした炎を纏うと体当たりをかましてきた。

その一撃はどんくさいトールに追突しトールを吹き飛ばす。彼は吹っ飛び壁にひどく打ち当たる。トールの近くにあった金貨の山がザーと崩れた。トールはなんとか体を起こそうとして

「痛たた……」

しかしトールはルージンの攻めのダメージにより立ち上がれない宙に漂うルージンに向かって銀色の長髪のカルトが走る。彼の右手には闇に被われていた。強化魔法で脚力を上げジャンプしその手をルージンに接触させる。

カルトは勝利を確信しニヤリと笑った。しかし結果は彼の予想に反していた。

「小僧の分際で闇食いを使うとは……しかし相手が悪かったな」

ルージンは黒いもやに囲まれた手でカルトの右手（闇食い状態）を握っていた。ルージンも闇食いを使いカルトの呪文を防いだのだ。ルージンは右足でカルトを蹴り飛ばした。しかもただの蹴りではなく無属性の魔法で強化された一発だった。

あまりの威力にカルトは宙を飛び何度も地面に体のいたるところをぶつけた。宝石があらわれた鎧や銀色のネックレス等がうずたかく積まれた山に背中をぶつけようやく止まった。

金色の王冠が宝物の小山から落下しカルトの頭の上に乗った。まるで美男子なうら若い王子様のような。カルトはピクリともしない。ルージンの強さは圧倒的だった。十人並みのノルテではない。

ルージンはトール達が仕留めてきたノルテの範疇を大きく上回っていた。まるで希代の怪物アグマを思わせる実力者である。スマレが走り寄り地面に足をつけた強靱なルージンに強化魔法で破壊力を上げたパンチを繰り出した。

その一撃は金属製の鎧にクレーターを作る程の力を秘めていた。スマレの放った一発はルージンの右頬を打った。しかしルージンはニヒルに微笑み平然としている。続いて強化された蹴りをルージンの右脇腹に決めるスマレ。

しかしルージンは微動だにしない。

「女よ、無駄だ。……楽にしてやろう……」

ルージンは暴れるスマレの頭を掴み宙に持ち上げた。ギリギリとルージンの握力でスマレの小さな頭部が締め付けられる。彼女は苦痛を表情に表し

「痛い！」

「女よ、首を撥ねてやる。楽になるぞ」

ルージンは左手でスマイレの頭を掴んだまま右手に炎を宿し振る

(駄目だ！ このままじゃスマイレちゃんが殺されちゃう！ 僕にも
つと力があれば……力があれば！！ 力が欲しい！！！)

「ガーーーーー！！」

と思考しトールは吠えた。獣のような咆哮だった。その声にルージンの右手がスマイレの首に触れる寸前に止まる。纏っていた炎も消える。トールを目を細めて凝視するルージン。ルージンは啞然としスマイレを手放し(地べたに倒れ込むスマイレ)

「ま、まさか……この独特な力の波動は神人!?」

トールの顔や全身の皮膚から赤い毛が凄まじいスピードで生えてくる。そして口には牙が生え、指が膨脹し爪が鋭くなった。トールは豹変しまるで虎のような顔をしている。

「ト、トール?」

地面に接地し尻餅をついたスマイレはトールの名を呼んだ。驚きと畏怖の混ざった声だった。スマイレの体がトールを見ていると震える。トールの姿は人型の獣へと姿を変えた。彼は首を曲げコキツと鳴らすと地面を蹴った。目にも留まらぬ速さだ。ルージンはまがまがしい気配に体を後ろに反らした。

「グワツッ!」

ルージンの右腕の肘から先が消えた。血しぶきが上がり顔色を悪くするルージン。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9467y/>

トールの直行

2011年12月18日10時45分発行